

自由連合

Libera Federacio

1969年
9月25日

N-ro. 7

姫路市亀山354

101号方

自由連合

定価 送料 共
1部 30円

お知らせ
発行所の住所が変更
ています。電話078-3326

LIBERA FEDERACIO

1969年 9月25日

自由連合

自由連合

P.1

70年アンボ・11月斗争への視点

11月の佐ト訪米阻止斗争が、決戦とまで呼ばれるのは、それが60年代斗争の決算としての意味をもっているからだという。

60年アンボにおいて、「敗北」あるいは「挫折」とし、その中から次第に先鋭な斗争戦術を展開して来た新左翼諸派にとって、羽田、佐世保、王子、成田と続いた67、68年の斗争は、まさに自らをもって、「戦う学生」という誇りをもたせた。

ところが、東大安田荘落城に始まる69年の斗争は、霞ヶ関に異常な緊張をもたらした以外、川奈アスパック斗争に見られたように、ただ消耗の連続であった。

11月に「組織」を賭けて臨むという姿勢は、まさにこのような劣勢に対する自己責任と、同時に、「戦わざる者」への告発として、提起されている。

だが、70年アンボの質は、60年のような、「通す、通さない」の一枚岩的な問題をはるかに超えているのであって、むしろ、70年にアンボが「自動延長」された後の70年代斗争を担ってゆくべき、持続性をもった斗争内容を要求しているのである。「状況の先取り」を云うならば、まさに、70年以後のそれについて語られねばならぬだろう。

同様に、佐ト訪米阻止斗争にしても、阻止できるとどうかの結果は、斗争の本質的な問題ではない。実際問題として、仮に佐トを殺すことによって阻止し得たとしても、政治的状況は質的に変わらないのである。

むしろ、佐トの帰国後、国会が解散され、総選挙で再び佐トが勝つという、政治の茶番劇、ナニセンス劇を予想した上での、議員制民主主義、解散、総選挙をもくつかえす質をもって、この11月を斗わねばならない。

それはたんに「状況の先取り」であるだけでなく、70年に、あ

るいはそれに続く時代に現出するであろうところの、権力と人民の緊張関係、自由と抑圧の関係相対と同一質の関係相対が、現代的に提起されているということである。

それは、何れ11月を与えられた特殊な時点とするのではなく、常に現在に課せられている問題であり、さらには、過去、未来のすべての時点に共通する普遍的な課題としてとらえることである。

ここで11月にしかやる時がない「70年こそ決戦だ」というようなスケジュール的な論議は、一見英雄的に見えて、実は、常に現代的に課せられている問題を回避していることにはならないだろうか。

11月斗争は、佐ト訪米という形で、権力から規定された国家の現象的な動きに便上的に対応するものとしてではなく、われわれからの自発的な70年代斗争の起点として、展望されねばならない。

11月斗争の重要性は、われわれ自身の主観的な価値の付加によってのみ評価されるのである。

政治的セクトにとって、11月は、街頭を中心とした過激なデモ、ゲリラ斗争が予想される。彼らの70年は、いわゆる中央権力斗争として斗われらるだろう。

しかし、70年斗争のためには、それ以上に、土着化するための広範な運動と、意図が必要である。それは何よりも、「下から」の持続した斗争を保証するものとして位置づけられねばならない。

正直言つて、ぼくには政治的セクトの斗争の姿勢に絶望的な焦りが感じられてならない。一方で市民運動の巨大な盛り上がりを見ながら、セクトの先鋭化へあるいはせ細りを見送るしかできない。そんなことにかかわってはいられないのだ。

ぼくが焦るのは、セクトとは全く逆に、今こそ地道な大衆運動の必要な時だという思いである。

権力支配に充分対抗し得るだけの持続した斗争は、土着性と自立性をもたねばならない。それは各個人の特殊性、個別性を追求した上での、自発的な斗争でなければならぬ。それは、たんに斗争主体の自立をめざすだけではなく、斗争そのものの自立を、持続性のある斗争の場を獲得するものでなくてはならない。こう言ったとき、斗争の場の自立とは、あの「自治管理」への道を暗示するのである。

フランス五月革命では、大衆的なデモがパリの大通りを埋めたが、それは斗争の一つの表現形態で、あくまで斗争を支えていたのは、各職場、学園での自治管理斗争であった。一部に見られた権力との武力斗争は、むしろ斗争の破産の過程に生まれたあがきであった。

また、日大にはじまる全共斗運動は、基本的に、管理村としての大学を、学問を志すすべての人民に解放しようとする斗争であった。それは、「解放大学」などに見られるように、理念的な展望を含んでいたにもかかわらず、何ら具体化を見ないまま、特動隊による封鎖解除、いわゆる「正常化」の壁に突き当たって、街頭に出ようとする動きが最近見られるようになった。

しかしそれは、全共斗運動の政治主眼への歪曲的な置き換えであって、運動理念の衰弱を証明するものに他ならない。

むしろ街頭斗争には、それを支える土着した斗争が先行しなければならぬ。全共斗運動は、その理念を極限にまで押し進めることによって、11月及び70年代斗争を主体的に担ってゆけるのではないだろうか。

11月斗争を起点とする70年代斗争は、まさにこのような個別性のもとに土着し、自立し得た斗争の、多様な展開と、さらには、それらの自由連合的な調和をもって、国家権力にまっとうな対峙し、権力相対そのものをその根柢から打ち崩す、永久革命を志向するものでなければならぬ。

滝理

こちら 朝霞反戦 放送局

×月×日
快晴。I嬢、からし色のきれいな洋服で登場。三人で一〇時三〇分かつぎりに野戦病院前の空地に横幕をひるげて放送開始。

テープでS-I氏の開局のアナウンス。「ジス・イス・レイデオ・キャンフ・マスト・ゴ・ジス・イズ・アサカ・ステーション・RCMG。……」
「二エース」。新宿西口でのベ平連のフォーク集会の模様と米国内での三万五千名の戦死者を悼む催しなど。ここでジョーン・バエズの「ドナドナ」を流す。次は主張。Wが大衆市民の集い発行の英文反戦ビラを朗読。「キャンフ・アサカの米兵諸君、以下の諸点は明々白々だ。(1)アメリカはベトナムの土を踏みこむ侵略者である。(2)ベトナム人は自衛のために闘っている、その基本的な民族の権利を守るために正義の戦争をしている。……」

「反戦大気手紙。基地の上空は一日中雨雲がたかこめている。」
ついで「市民の声」、I嬢が通訳する。「僕はAといひます。一九才の運転手です。僕はあらゆる戦争に反対です。ベトナム戦争にも反対です。ベトナムで斗うのをやめてほしい。国へ帰って徴兵拒否している人々と一諸に斗うてほしい。」

「海外からのメッセージ」、ベトナムの病院で働いているアメリカ人女性からの手紙。それから反戦フォークの「グルーエル・ウォー」。本田勝一氏の「戦場の村」の英語版より第一節。

終りは「コマトシヤル、ニクソン社の自動車は衛生的でお買得品です。車の行先はつねに病院ですから」。結びは四人で「ウィー・シヤル・オーバーカム」の合唱。
米兵はかなり自由に出たり入ったりしてきていた。のべ二〇人ぐらいか。MPははじめ別の用事でなにやらあちこちしていた。終るころ二度ほどわれわれの前を往復した。これで午前の部を終了して引き揚げ。

午後五時一五分に横幕をひるげると、黒人兵と二人の白人兵が柵のところによってくる。黒人兵はI嬢から反戦ビラをうけとりながら「自分は二年日本にいたが、またガール・フレンドができない」という。二人の白人兵にWが「アメリカはベトナム人民を征服できない」というと、むきになって、「いや二時間で全滅できる」という。「そうだろう、だが、決して征服はできない」というのは、「アメリカはパワーのある国だ、だからどこへもいくのだ」という。さらにレッド・チャイナの侵略云々という。

五時三〇分開局。第一面の経験から音楽をふやす。アメリカの婦人平和団体「ウーメン・ストライク・フオア・ピース」の子どもたちを救えと題するLPより二曲、黒人団体CORE（人種平等会議）の「シット・イン・ソング」のレコードより「マイケル・ロー・ザ・ボート・アシヨア」と「ウィ・ウエンド・タウン・トゥ・ミシシッピ」それぞれにバエズの「風に吹かれて」の五曲をはさむ。
「海外からのメッセージ」として一九六六年に解放戦線放送を通じてバートランド・ラッセル卿がアメリカ兵によびかけた演説のテキストを朗読。

「市民の声」は、W。「私は三〇才の主婦です。私には子供が一人あります。ベトナムで子供たちが毎日傷つけられ死んでいくという話をきくとかまんできません。私はあなた方に同情しています。私はあなた方がなげいかなければならぬことを知っています。あなた方のために、ベトナムの子供たちのために、この戦争は早く終わらなければなりません。私はそのために努力していくつもりです。ベトナムでこれ以上殺さないで下さい。」

特別な出し物として、昨年一〇、二一の新宿区の学生デモの真実伝す「全国の基地を撤去するぞ。学生は最後まで闘うぞ。わあしい、ピッピッピッピッ……」日本の青年たちは反戦のために立ち上がった。それこそを考えてほしい。なぜアメリカの青年は三万五千人もこの醜悪な戦争で死ななければならぬのか。ヒワイ・ユウ・マスト・グイ。

学生諸君の「わあしい」には米兵もMPもおどろいた様子。MPはかゆに自動車をとめてうかがっている。

だが、出てきてきく米兵を規制しなかった。「マイケル・ロー・ザ・ボート・アシヨア」を流した時、黒人兵は踊り出した。

共同通信のH記者とカメラマン氏が取材にきた。成増のアマチュアカメラマン氏も見に来る。彼は、自衛隊の写真もとっていて、おこられにきいて、自衛隊に対してこのような働きかけをやったらどうなるでしょうかときく。おそらく、おつと難しいだろうと思う。

この日、共同通信の記者氏は現場近くにとめてあった自動車から本社と連絡をとって来たが、警察のバトカーがこれを基地への工作とみかねて、自衛隊のナンバーを照会した上、防衛施設事務所と連絡した。そこから共同通信の方へ苦情がきたとのこと。

（大泉市民の集い機関紙より）

自由連合社告

☆ 新「自由連合」も今号で7号を迎えました。連盟解散後のアナキズム運動の錯綜した中で、アナキズムの全口紙を目指して発足して以来、今や二千部というこの種のものでは例のない発行部数を誇っています。そのほとんどが向井孝氏の捨て身の努力でもたらされたものです。

☆ 自連は今号より向井氏を相談役として数人の社員有志を創られます。力量不足のため読者の皆さんに不満の泉があると思ひます。ほくらなりに考えたことをそのままぶつけてゆきますから、ごくくばらんの批判をお願いいたします。必ず返事は書きます。☆ 「対話する新聞」の自連社では、可能な限り多方面に出向いて皆さんと対話したいと考えています。とりあえず10月から11月にかけて、京都、大阪、神戸、岡山で「自連読者会」を開くつもりです。ごきれば今年中に北海道から九州まで出かけたと思います。詳細はあとでお知らせします。

☆ 自連の読者拡大に協力して下さい。紹介してもらった人には、二号続けて無料送付します。

☆ 皆さんの活動を伝えるもの。たとえば、ビラ、パンフ、ステッカーなど。何でもけっこうです。自連社まで送ってください。そのつど「伝言板」の欄で紹介いたします。

自連社編集スタッフ一同

炎のキヤンパス

これだけは確認しておこう
大衆団交に臨む教授の条件

DAL Action
Direct Action
pour Liberte
大衆団交の
ための直接行動

先日の夕刊各紙に教授会が決ったことが載っていた。封鎖学生と教授会メンバー全員が話し合うといった内容で、近く予備交渉を始めるそうだ。封鎖に参加している僕にはもちろん、全学斗の議長さんにも各セクトにも、クラ反にも、チラツとすら教授会からそんな話には伝えられていない。

僕は例の新聞記事が若干気になつていたので、次のような郵便紙をした。

教授会構成員諸兄へ

×月×日

DALは諸兄の思い通りの結果が気に入らない。とにかく封鎖を解かなければ、という焦りが諸兄の思考を停滯させ、行動を鈍くさせている。

DALは諸兄と真摯な討論をするために次のことについて、諸兄ととりかたかりを言ひなければならぬと考える。

1. 大学法を守らないこと。つまり、不服従宣言をすること。

2. 自分の立場を明確に宣言すること。管理者として話したのか、研究者としてか、それとも教育者としてか、それともほかの何かの、但し、人間として、なんというのかは全然だめだ。

3. 封鎖行為を規定すること。不当だとか正当だとか不都合だとか好都合だとか、あるいはくやしいとか感無量だとか。

4. 自分にとって教室とは何なのかを明確にすること。学問と不可分だとか、教育するのにもっとも合理的だとか、関係無いとか。

5. 現実の資本主義社会に教室はどのような役割を果たすかを明確に論ずること。《諸兄が社会学者と自負するのなら話だ》

6. 泣きごとはいいなれりこと。たとえば、かくかくしかじかの迷惑がかかっているとか、留年しないためのタイムリミットがどうのこうのとか、要するに、封鎖によつて必然的に生じた今までの体制の亀裂の程度についてのたれごといわれないこと。

7. 権力的な脅迫をしないこと。

それをDALはちつともおそれはないが吐き気がする。

8. 教習だと思つて偉ぶぶらないこと。今までも惨々その権威幻想を壊したが、その口のきき方はなまじきだ。なんて言う人がまだ沢山いる。それはぼくらが使うことばなのだ。以上の条件の下でならDALは諸兄との話し合いに応ずる。

が、待つていただきたい。ぼくらは休み前の、大衆団交を継続中だ。無理して別の機会をもち上げることはないのだ。DALとともに闘うと宣言してない諸君、そして一般的に封鎖に反対の諸君は主観的願望はどうあれ、DALと敵対関係にあるのだから、機会の選択には及ばない。

論争 永久ベ平連小論

仙台へ平連個人線結集にぞこ

ベ平連は五五年四月に発足したそうだが、その頃の自分か何をしていた、ベ平連が何をしようとしていたのか殆んど覚えていない。

僕の前に現れたベ平連は、石畳だつてベトナム戦争反対を言つて参加できるようなベ平連では良になつた。すでにとつてみたものの、それ以前がどうであつたかどうかも知らない。つまり僕にとって、ベ平連とは「ベヘレン」であつて、ベトナムに平和を、市民連合ではなないのだ。ベトナムから米軍が立ち去つたら消滅するベ平連などチヤンチヤラおかしな思ひである。そしてあえて僕のベ平連の消滅するときを討置するならば、ぼくのなかのベトナム戦争が終つたときである。すなわち一つの未来社会運営のモデル、ゲースの意味を与えている。

市民運動だからベ平連には限界があるという人がある。話の途立ちとはともかくとして、市民運動と呼ぶのが階級斗争と呼ぼうか、問題は現存的な自分の力量へ可変的で支配権力に可能なかぎり多くのイメージを与えるために何をすればよいかということ以外にはない。その何をすればよいかは、生産斗争が街頭行動か、花を配るか交番焼き打ちか、ということに留まらず、それらは、自分と支配・権力とのかわり

のダイナミズムを見分けることから始めなければならぬ。ベ平連運動が、全般的な人間抑圧（全的であるがゆえに敵の正体は掴みにくい）を掘りおこす形ですすめられてきた理由もそこにある。

市民が来ないならこちらから出ていこうと定例行動を開始したのは京都ベ平連であつたらしい。

僕はハンパケ以来、コカコーラのヘビー・ドリンクカーであることも断つた。そのことはベ平連的ということとは無関係でなけり。僕は差別と収奪の結果物である商品に依存している。そのきわめて一部分、もうそれはアホらしいほど一部分との関係を断つことは、いったいどんな意味をもつか。

チリも裸もれ山となる神話をどうしても笑い捨ててしまふことかできなけりという笑、別に会社からチラまれるというふうなことのなけり。こので、会社からチラまればよいという力をつける運動（前運動）にならなけりかという笑——郵便番号記入拒否運動・交番の前で立ち話をしつて何か情報はないかと探す運動・マジックをハンドバックに入れて、所かまわぬ落書きする運動・ビールデンバツトしか吸わなけり運動——

とにかくできるところまでやろうと気軽にはじめたら、最近ではあらゆる精液飲料（ビールを除く）は全然飲まなくなつてしまった。コーラを無理して飲まなけり、ジュースを飲む前果かどこにけり。更にはこんなエスカレートは全く予想していなかつたので、何か他に活用できなけりかと考えている（井原ひでお）

。「永久ベ平連小論」は、一九六九三・五に出された仙台ベ平連個人線結集」に対して書かれたものである。その仙台ベ平連個人線結集の概略は、次のような内容である。

ベ平連は市民的自己主体性の外的提示でけりない。ヒューマニズムの叫びに固執するのみで、ベトナム戦争と日本政府の積極的加担の必然的要因を認識しての反戦斗争、さらに階級斗争として位置しえなかつたのではなけり。自己幻想にも等しい「ベ平連の限界」を思い出した。真の運動体でありえず、現実傍観・核のない、アメーバ的土壌であつた。我々にとつてベ平連という欺瞞的土壌を粉砕・打ち破ることが自己組織の主体確立の要に他なけり。以上

自由発言

忍草から 砂川反戦聖壕へ

「北富士で、米軍の着弾予定地に生命を張って騎馬に乗り込み、団結小屋で鎌を抱いて、五〇〇日以上もがんばる闘いをしている私達の気持からすれば、旗だろつと何だろつと、もっと高く、もっとがんばろうに、是非立ててほしい。世の男たちは、大抵は、もうこの辺でいいだろうと、いいかげんなところで妥協してしまつたらメーなんだ。」

私達女は理屈もへったくれもない。渡辺会長さんほどのお年の方でも梨が原の入会地が便でないために、女工方へおんなどかたになつて働きに出なければならぬ。生活が苦しいのです。旧陸軍が「陸軍で使用しなればいつでも地元にいかす」という一札を入れて使つていたものを、敗戦後、米軍にちよつと文句を言えない状態の時に、米軍が演習場にしてしまったのです。それを、自衛隊が勝手に、米軍から譲り受けたなどといつて居すわり続けている。私達は、忍草のお母さんばかりです。力だけだと米兵や自衛隊の男の人の力には負けますが、そんな連中はみんな口で追っばらつてしまひます。

昨年、梨が原を地元に戻す事を約束させた防衛施設庁のすわり込みの時でも、私達は、いいかげんな理屈ではテコでも動かさない。私達は質問もないバカですから「梨が原を地元に戻す」という一つの事は、はっきりしない限り、絶対に動かさない。この辺の男の人達と違つてです。

反戦聖壕には、電気が入つていますが、私達の団結小屋はランズです。連絡は部落まで走つてするほかありません。米軍が小屋を焼き打ちしようとした時は、お母さんが小屋の中に飛びこんで、自分も一諸に焼けといつて、焼き打ちを止めました。

鎌を拵つて、いつ襲つてくるかわからない敵に備えて、着のみ着のままで寝ます。

……実力奪還あるのみです。
(忍草・天野美恵事務局長)

僕は7月以降、2回に分けて精神的恐怖と物的損害を行つてきたけれども、それよりもやはり今少し考えねばならぬだろう。それは、11月斗争以降の日本一米一仏一伊一英一独一先進国に於ける階級情勢の変化、主体の飛躍を考えなければ出てこれなかったものだと思ふ。11月斗争形態の具体的内容は言ひきれないが、或る程度の武装形態を含みうるだけここまでは言つておく。そしてその事は、戦後日本左翼が22年ノに行ひをなつたセネストの質的な上回りを開いて、展開しなればならぬし、

Ju.Ju. 由題に因して

日共の火災ビラに越える内容で開かれるであろう。そういった情勢の中に、化エム闘争だけども、それはあくまでORGをして引き入れてゆくという内容のものでなくして、自由参加と云う形態だと思ふ。そもそもORGとは、する者化さる者と云う図式が示すように、さる者化さる者。さる者々の集団に引き入れられる為にする事だと思ふ。だがここで考えなければならぬことは、(非常に重要だが)話しをするという事は、ORCする事でも、さる者化さる者でもないという事である。コミュニケーションはM.A.R.X.の使用したA.R.I.E.N.自己表現という概念からするならば、ORCという言語は存在しなくなつてしまふのである。そして、それは常に受け取り手の側に責任があると思ふ。さる者化さる者という人権的受身の思考ナンセンスな考へによつて正しく言うならば、その考へる人の全存在、生存姿勢に発生した言葉だと考へる事ができると思ふ。(Ju.Ju.とは都立化工高校バ平連カルースである)

「観るもの」観えないもの

(自連オ5号オ1面)に因して

③に述べられている「観るもの」との斗いにおける暴力に根源的な力としての非暴力」という設けは容易すぎないだろうか。非暴力本能がそうあるように暴力「本能」も又根源的である。
へ民主主義」の足力にうかがいて

いるアルジョワの良心には暴力は、彼ら思考の凍結に対する溶解剤になつてくれる。又、伯の暴力も、いくらか量的に野放図に拡大しても、伯にとどまる限り、伯における精神との深い亀裂がなければ「反社会」たることはない。社会拒否するものではなく単なる暴力に終つてしまふ。

非暴力、暴力というものは政治のレベルにおいてはあくまで方法論にとどまり、「方法」(技術、手段)によつて、それをなした主体がいかに内的にも変化するか、変質するか、作用をうけるか、どうかは別の問題である。

非暴力をつらぬいて公的権力の破壊生活者の領域における文字どおりの自立が確立されたある日、妻の暴虐に鬱積していたエネルギーがいつにゲンコツになった、というのは恫喝である。
(因幡節)

千葉高生の自主講座を支持する

7月下旬、千葉高生は校内での「自主講座」を計画、実行した。

千葉高生会談・自主講座委員会の発行した「全校生徒への呼びかけ」は「小学校以来、我々は他者から与えらる教育を受けてきた。入教師」というへ機械を相手に毎日を通すことを強いられてきた。我々は、自主講座をこのような教育に對置させることによつて、それゆへに自主的に高校教育に主体者として参加し、現在の高校教育の内容の吟味を行おうと呼びかけている。

千葉高生が自主講座の具体的テーマとして選んだのは、「教育と社会との関連」「受験生生活と受験教育の分析」「戦後教育史」などの高校生の現在の生活と意識に密着したものであった。各講座の講師として迎へられたものは、大学教授、他高校の教師、同校OBの大学生で、高校教師の免許の有無が問題とならなかつたのは、現在の高校教育への痛烈な皮肉であつた。

もともと昭和26年の「学習指導要領」高校編には、生徒のカリキュラム自主編成権と、学校のそのカリキュラムを實現させる義務を明確に規定している。生徒にとって現在の没主体的な教育から脱却し、各自、自己の必要や個性や興味に応じて科目を選び、さらに授業を自分達で創り出していくための、「自主講座」は大きな指針を示している。

リベルテの半年

「リベルテ」はここのし

一月に北海道・東北地方のアナキスト・アナキズム共鳴者の連絡誌として発行された。リベルテ社には特定組織はなく、参加者同くと呼びながら「リベルテ」発行ごと切手30円以上の拠出と投稿を義務づけてきた。

リベルテは中地域アナキズム運動だと思ふ。印刷物を出しているところなど大地的運動形態だが、一方でその印刷物の作り手、受け手を同一化しようとするところなど、小地域運動のなまなましい具体的関係を生かそうとしているわけだ。二つあわせて中地域的といわざるを得ない。

各地においてリベルテ同人は一見手も足も出ない状態にあるのだらうと思ふ。ただ意外な誤解があるのではないだろう。――祭典的ハブニンス的運動でなければ運動ではないと思ひこんでいるのではないだろうか。

それで結論、リベルテ発行ごと切手30円以上の拠出をラズでされは発行ごとの投稿をきちんと守りあい、なお説理の必然に対する畏敬の念から書きました。――同志のみなさんへ

三里塚の天王山

九月八日、三里塚芝山連合空港反共同盟青年行動隊ワ名と、反共同盟幹部一名が、早朝行動隊に襲撃され、逮捕された。空港移転に伴う御料牧場肉墓式に乱入したという逮捕理由である。

だが本場のねらいは、工事期限のタイムリミット、10月着工を控えてきたのである。

この日を待っていた。と、老人行動隊のやオをこす指導者達はふりあげたこぶしをフルフルふるわせて叫ぶ。もう理屈をいってやる場合じゃねえ！ヒヨウは死んでも皮を残す。どうせ長い命じゃねえんだからフルドーサーに飛び

こんでも土地には入れさせない！。この弾圧はかえって強じんなバネのように当局を撃ち返すだろう。今尚空港用地内には反共同盟二〇戸が頑張りつづけている。いよいよ実力闘争の時がきた。

「斗う三里塚に結集せよ！」

今や斗いの火スタは切って落されようとしている。全国津々浦々で斗っている同志、市民達！斗う三里塚に結集せよ！

（三里塚斗争本部・芝山斗争本部・三里塚救援会・反共同盟事務局）

皇居内発煙筒事件

一月二日の参勤の日に皇居内広場で発煙筒をあげた大島英三郎、河本嘉昭二氏の公判は、東京地裁で九月九日判決。求刑ハヶ月が徴役四ヶ月（未決通算六十日）の判決。河本氏は求刑六ヶ月で来る十月八日午後一時から判決の予定。

罪名は建造物侵入、火薬取締法違反、ともにその適用に大きな疑問を残しているが、検事が求刑にあたって、特に皇居内の事件として重大視する旨を言い立てたにあり、旧刑法の「不敬罪」の意識に益れるものを見た。

★晩走兵通信 オ三号

表紙の写真はジョッキンかである。焼けこけた米兵向け反戦誌からのコピーであるが、首をもかかれた二つのベトナム人の死体の前に、その首に片手をかけ、もう一方の手に銃を抱えている4人の米兵が、得意気に笑っている。この写真は、米軍がベトナムで何をなしているかを表わしているとともに、諸君が何をしなければならぬかを示唆しているのではないだろうか。

★麦社 パン

東京の麦社によるパン発行活動は順調に続いている。オ一回の近藤憲二著「私の見たアナキズム運動史」オ二回のバクトニン著「社会革命の綱領」につづいてオ三回は「マフリ著「独裁と革命」、オ四回は「ベルクマン著「クロンシュタットの反乱」が発行されている。麦社ではその他に「麦社インフォメーション」を月

刊発行している。自由連合社ではパンの通信販売をしています。運動史には二五〇円、その他は二〇〇円です。

★中決哲過去帳覚え書

9月23日大阪で開かれた「中決哲を偲ぶ会」のために逸見吉三氏が特別に編集したもので、中決とつながる多くの人がそれぞれの興味深いエピソードを寄せている。資料としても貴重なものである。東大阪市大連一八八、逸見吉三から一〇〇円と郵券（35円）で取り寄せられる。

★黒パンー祖国と自由ー

黒パンの原本復刻がいに実現した。三〇〇部の限定出版である。殊算を度外視した一部の人のこのような奉仕的な活動に敬服させられる。諸人中決の全貌を知るためにも好適の本である。一部千円（郵送料別）で逸見氏から譲り受けられる。

★知公知公 No1

黒版社の月刊機関紙である。「北一輝の純正社会主義と岩佐作太郎の純正無政府主義を土台に据えて、新たにアナキスティックなアナキズムを追求していく。運動体としては非暴力直接行動を長期にわたって持続する」とある。

★「叛」 オ一号

名古屋アナキズム研究会の会報。アナキスト系反戦青年委員活動を目指す労働者会員の「自主管理理論」追求の問題意識が伺える。

なお10月4日、名古屋青年会館で「アナキズム講演と討論の会」が同会主催で開催される。

★大阪アナ研

大阪アナキズム研究会は毎月二回「ジョージ・ウッドコック著白井厚訳「アナキズム」(思想編)」をテキストに研究会を開いている。次回は10月15日（水）天六の北市民館にて6時より開かれる。連絡は、大阪市東住吉区桑津町の90山口方同会へ。

連載 ヨロコバ・アナキストの
武者修業の記 尾

モナコに亡命しているスペイン人アナキストのマチアス・クラシアをぼくに紹介したのは、イタリア人アナキストで脱走兵のカルロであった。カルロは脱走後二スのアナキストを頼つてきたのだがフランスでは合法的な居住権を持たない脱走兵は就職できないため仏と伊の国境近くにある世界一小さな独立国？モナコでの脱走しをマチアスに頼んでいたのだ。

モナコはふりぎな国だ。大阪市ほどの面積で、人口は観光客の方がモナコ人よりも多いだろう。地中海岸に面して有名な別荘が並び、その背後に天宮にも優るギャンブルの殿堂が七色の噴水と照明にかざりて夜中にそびえている。産業らしい産業を何一つもないモナコは、観光客の遊び金で国の経済を支えている。だからイタリアからもフランスからも入国するのと同様らしいものはない。ぼくなんかも、ヒッチハイクの車が30分も走つたかと思うと、いつのまにかモナコの首都モンテカルロに着いてしまつてた。

こんな事情で、モナコは昔から大ギャンゲや左翼活動家など、合法の世界に生きられない、国を捨てたありとあらゆる者の余り者たちが、影のような一面を形成して住んでいる。そこは無法地帯でとりわけぼくのような顔形の遠く東洋人の立入りは危険で、生命の保証もできないという忠告もあつた。さて、マチアスの家は、ぶつうでは絶対にさがせようもないところにあつた。たゞ夜がこのカスバでは名の知れた活動家だつたのでチンピラ連中に良く知られており、その一人がぼくを入り組んだ露地奥の倉庫の一室へと案内したのだつた。

マチアスは若く、まだ30をいくつも出ていないように思われた。『スペインアナキストのニセ？』とぼくは尋ねた。『いや、私が生れた時はもうフランスの時代だつた。が少数のアナキストによるフランスへの攻撃は、まだ続いている頃だつた。』『F.I.J.ヘイリア青年リバーティアン連盟』のテロ活動にあつた。』という

ぼくの向いに、マチアスは『ワッハハ』と笑い声でそれを吹き飛ばして、『丁度いまからイタリア人の亡命アナキストのじいさんをつねねることになつてゐる。一緒にしないか？』という。

その訪問の途すがらマチアスはいろんなことを話した。スペインでの地下活動で、幾度も死ぬ思いをしなから、奇跡的に逃げてきたこと。いったん落ちついたフランスのツーリスでも、スペイン警察と通じたフランス警察に完全にマークされてとうとうモナコのカスバに来てしまつたこと。偶然にも、この地で同じように流れてきた数人のアナキストとの出会い。さらには二スのアナキスト・クルースとも連絡をとり、今日かなり強力な組織をもつて致つてゐると語つた。もともとこの住民のほとんどが過去に何か違法行為をした、アンタツチャマルの住民であるうえ、毎日フルジョワのものバカ騒ぎを目の前に見て生活しているため、彼らの反逆心は、じつに率直に裸のままで権力に真向からぶつかるものがあつた。それは今まで知つてゐるバクーニンやブルードンの思想を掲げてくりひろげられた運動と

違ひ、権力への憎悪が何のイデオロギーも左翼的ポーズも必要とせず、反権力の感情が火の玉となって権力とぶつかるのを感じとれた。それゆえに、何か恐ろしいほどの緊張を感じざるを得なかつたが、そのわりにマチアス自身は全くと言ってよいほど暗さや思ひつめたところがなく、むしろ豪放らしい者と思われた。

『じいさん』とマチアスが時々イタリア老アナキストの家は、モンテカルロよりさらにイタリア側に寄つた街並から離れたところにある一軒屋だつた。この『じいさん』には、ぼくと同じ年の船員をしている自慢の息子と、眼の大きな高校生ぐらいの娘がいた。息子も娘も、英・仏・伊・西語がしゃべれるというので、ぼくも久しぶりに英語でしゃべることにした。一方、マチアスと『じいさん』は、顔を合わせたやうや、違ひなスペイン語で口から泡をとばしながらジェスチャーたつぷりの激論を始めた。『じいさん』の息子は、42年1月の佐世保斗争の直後に、佐世保に入港したらしく、日本の『センカクレン』にいたく感銘して、これ

またひどく興奮しながら、ぼくと妹に必死に説明するのだった。

ぼくらがこの家を出たのはもう一時を過ぎていた。『さて、どうするか。今晚の宿は、エイツ！モンテカルロのステーションベッドへすなわち駅のベンチ』だしと決めてバスに乗つたのは良いが、しゃべり続けたため疲れていたので、すぐに高いびき。起きて眼を開くと見覚えのある駅。さて、ここはと考えるまでもなく、今日出発したはずの二スに逆戻りしてしまつたのだ。カックリ。フーテン旅行の一人旅『こんなこともある』と苦笑しながら、駅の列車時刻表を見ると、イタリアの最終便がまだある。『なら、今日の宿はワゴン・リへ深夜列車で寝ること』とするか。切符だけ買つて列車に乗り込むと、客はアベックばかり。頭にきてベレーを顔に被せて寝り込む。バンティミリアで下車させられ、形式だけのパスポート検査を受けて、次に下りたのはイタリア最初の目的地であるサボナだ。サボナでの目的地は、現在イタリア人から『アナキスト將軍』と呼ばれてゐる男、イタリア・アナ連の代表者、連盟機関紙『ユマニタ・ノーバ』(新しい人間性)の主筆、そして、カミロー・ベルネリらとともに義勇兵としてスペイン革命に参加し、英雄的に斗つたウンベルト・マシッキーその人を訪ねることであつた。

(次号へ続く)

室集編

☆ 自連紙は一体どんなカテゴリーの新聞か、とさかれたら、ぼくは躊躇せず『政治新聞』だとこたえる。

☆ もし自連紙が『政治新聞』の概念とあまりにもちがうと云うなら、それこそぼくがのそんだところの『新しい政治新聞』だからではないかとこたえたい。

☆ 今号から編集・印刷・発送のはほとんど仕事を大阪でやつた。ちかいうちに自由連合社の住所も大阪から京都に移したいと考えているので、次号の自連の住所に注意してください。

☆ 今号は向井・尾関に加えて、中原ひでお、滝理、横田ギヨウさんのスタッフでできた。

(弘)